

発刊によせて

『奈良国立文化財研究所年報』は1997年度版から装いを新たにし、文化財に関する多様な調査研究、飛鳥藤原宮跡と平城宮跡の発掘調査概報を3分冊に統合して発行してきました。編集に際しては単なる業務報告をさげ、1年間に行った研究成果をわかりやすい言葉でビジュアルに報告するように心がけ、大方の読者から好評をえております。1999年度版は新しい体裁を取りはじめてから3年目にあたり、過去2年の経験をもう一度検討しなおし、さらなる内容の充実を試みております。

研究所にとって1998年度における最大の事業は、平城宮跡で進めていた「朱雀門」「東院庭園」復原の完成と公開でした。一部に未完成部分を残すとはいえ、調査研究・建設事業に多大の時間を費やして完成した二箇所のモニュメントは、おおむね好評で見学者の数も一段と増加し、平城宮跡整備における画期的な事件といえるでしょう。いうまでもなく各研究室における日常的な研究活動は大過なく進展し、それぞれの成果をあげ一部は年報に取りあげました。海外における共同研究も活発で、昨年度に引き続き中国「漢長安城」、カンボディア「アンコール遺跡群」などの共同調査が軌道に乗りいよいよ活況を呈してきました。

1999年度から所長が交代しました。田中琢前所長は在任中の5年間、優れた研究事業の方針を打ち出しましたが、なかでも個人研究の推進に心を砕き、所員と所外の研究者との協力による小さな研究会を奨励し、いくつもの研究成果が刊行物となって開花しました。新任所長も微力ながら前所長以来の諸事業を受け継ぎ、所員共々さらに発展させます。一方、かねてより論議されていた独立法人への移行が、2001年を期して当研究所にも及びます。組織と研究体制の変更は否応なく研究所の様変わりを意味しますが、究極の研究課題である文化財保護という根本は不動であり、人間と文化のありようが鋭く問われる21世紀には有用性が見直されることでしょう。今後とも研究所へのご支援をお寄せいただければ幸いです。

奈良国立文化財研究所
所長 町田 章

1999年9月27日